



(財)東京都埋蔵文化財センター五周年記念講演会

創立五周年にあたって

財団法人東京都埋蔵文化財センター理事長 水上忠

財団法人東京都埋蔵文化財センターは、昭和五十五年七月に設立され、本年七月には満五周年を迎えることができました。この間、役員、職員一体となって、埋蔵文化財の調査・研究、保存、活用、普及などの活動を行い、当面の課題でもある多摩ニュータウン遺跡群の調査につきましても具体的な将来展望を見通せる段階に至っております。

これも、ひとえに関係者をはじめ都民の皆様方の深いご理解と暖かいご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

また、本年度は、「マイタウン'81」東京都総合実施計画により建設がすすめられておりました「都立埋蔵文化財調査センター」の施設が完成し、去る四月十三日に、開所いたしました。私も財団法人の本拠もこの新施設に移転しております。

「都立調査センター」の内容につきましては、前号で紹介いたしました。とくに展示ホールが併設されております。

ここでは、現在「多摩ニュータウン遺跡群」と題して先土器時代から近世まで、時代順に、本地域から出土した代表的な遺物が展示されており、開所以来六月までの三か月間にのべ五千五百名(一日平均七十名)の方々が熱心に見学されております。

私どもといたしましてもこの創立五周年を契機としまして、気持ち新たに、事業の一層の拡充をはかり、広く都民の文化活動に寄与するよう、努力を重ねてまいりたいと考えております。

新施設の開所式



開所式テープカット

東京都立埋蔵文化財調査センター(財)東京都埋蔵文化財センターの開所式が四月十三日に行われました。式は、横田東京都副知事、桜井都議会厚生文教委員長、臼井多摩市長、村井教育委員長、水上教育長ほか約百五十名の来賓を迎え盛大に行われました。

また、ついで五月二日には、鈴木都知事と副知事が来訪され、水上教育長と当センター高橋常任理事らの案内で、施設を視察されました。

五周年記念行事



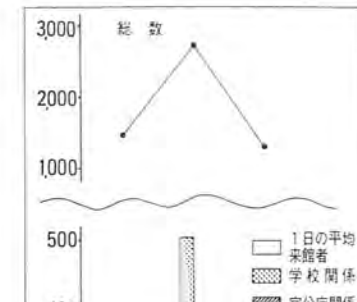
都知事の来訪

当センターは、七月一日をもちまして、開所満五年となりました。これを記念して、六月二十九日、国学院大学名誉教授樋口清之先生の「日本人の身体装飾」と題して記念講演会が開かれ、内外より約百五十名の受講者がありました。

また、五周年を記念して、多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査を記録する記録映画を製作することとなりました。

七月一日 昨年度に引き続きまして、この日はセン

トピックス



ター第2回安全の日であり各調査現場において、考古学、安全の話を中心としたミーティングがもたれました。また、この日をもって安全衛生推進委員会が発足し、安全衛生対策に取り組んでいくこととなりました。

七月六日 昭和六十年年度職員研究助成の対象となる職員が次の通り決定しました。

○個人研究 館野孝「東内野型尖頭器の型式学的研究」、武笠多恵子「古代における鍋形土器の研究」

○グループ研究 甲崎光彦他三名「中・近世陶磁器から見た多摩ニュータウン遺跡群の様相」、岩橋陽一他

四名「多摩ニュータウンを中心とした縄文時代前期後半の研究―土器様相を中心として」

また、職員海外研修は並木仁調査員、竹尾進調査員の二名に決定しました。

昭和六十年年度省科学研究所費奨励研究Bによる助成をセンターから次の職員が受ける事になりました。

可児通宏「遺跡群の分析からみた縄文集落の構造」、江里口省三「板碑の型式分化と需要関係の研究」

四月十四日 展示ホールの一一般公開が始まりました。四月、六月までの二か月間に、述べ五千五百人の来館者がありました。(左図)

人の動き

▼総務課庶務係長の齋藤龍司さんが四月十六日付で、教育庁人事部門計画課に異動、その後任には採用委員会事務局から小池友治さんを迎えました。また同じく経理係の平岡亨さんが六月二十日付で退職、その後任として亀山正史さんを八月一日付で迎えました。齋藤さん、平岡さん、ご苦労さまでした。小池さん亀山さん、これからの活躍を期待いたします。

▽今年に入り、移転、開所、創立五周年と、あたたかかったセンターも、ようやく落ち着いた感じをとりもどした感じの昨今です。(千村)

発行
財団法人 東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市 落合1-14-2
☎ 0423-73-5296
0423-74-8044
昭和60年8月31日



松木七郎の墓 (八王子市指定文化財)

今回は八王子市松木地区のNo.125遺跡を紹介... 遺跡は八王子市松木二号の区画整理事業用地内にあり、北側に大栗川と大田川との合流点をのぞむ北向き

時代から縄文時代、奈良・平安時代、中・近世の各時代にわたる遺構・遺物がたくさん発見されてきています。現在、中世の生活面の調査がほぼ終了した段階に

松木七郎の屋敷跡か？

No.125遺跡は、室町時代にこの地を領していたと伝えられる松木七郎の屋敷跡と目されている場所でもあり



2間×2間の建物跡 (地藏堂跡?)

呼ばれる素焼きの土器などがあります。これらの遺物は、おおよそ14世紀から15世紀のものと考えられます

れに墓ないしは貯蔵庫と考えられている地下式横穴三基があります。これらの遺構は、武士の館跡とか城跡

謎の松木七郎

ところで新編武蔵風土記稿によれば、松木七郎は鎌倉公方足利持氏の幕下の武士で、永利二年(二二七六)



遺跡の位置 (O印)

九八)です。七郎が持氏の幕下であったという点とは有り得ないことなので、この点に関しては、風土記稿の編者も不合理を指摘しており、地藏堂の堂主

文化財講座(4) 遺跡に残されたもの

最近、「考古学ブーム」という言葉をよく耳にする。ブームとは、あることがにわかには盛んになることで

発掘によって手に入れることができるものは、壊れること、腐ることを免れて今日まで残ったものに限られるからである。例として、縄文時代の衣・食・住

Table with 4 columns: 年度, 年間総排出货量, 内 (可燃物, 不燃物), 訳 (9,962, 2,642, etc.)

ゴミ処理状況の推移

て、考古学的には最も知られている分野になるが、これについても、掘り込んだ床の部分が残っているにすぎず、肝心の建物の構造については推測の域を出ていないのが現状である

多摩の歴史を訪ねて④

鎌倉街道と霞ノ関

鎌倉幕府開設以来、各地から「鎌倉へ向かう」中世および近世の古道を鎌倉街道と呼んでいる。一般には上ノ道(武蔵路)・中ノ道・下ノ道が主体となっている

倉攻めの進路となった。乞田の大橋から関戸までの間は、両側に小高い丘陵をもつ要害の地であり、軍事上からも重要な地として早くから注目されていた